Schwinger凯函数微分方程式と超準解析

九大 工学部 川畑茂徳

§1. 超準解析 (nonstandard analysis) の場の量子論 4の応用を目標とする。 具体的には超準的に一般化された函 数の理論とその上の汎函数微積分に大別される。前者により て繰込み理論、Dirac空間の数学的基礎がけを行い、後者によ って Schwinger 汎函数微分方程式を取扱う。超準解析を用い た Diroc空間の教文的基礎がけは、G. Takeuti" M.O. Frarrukh?) 筝によって試みられたが今のところ成功したとはりえなり。 倒えば線型作用表の連続スペクトル入に対応する固有ベクト いをexとするとき、(ex,ex)= su-x) が Diroc 空間で成立す る。この関係式を誘導できる理論は今まで存在しりち、たよ うでする。我なの超準的に一般化された函数の理論では,《 独立変数をかける》作用素, 微分作用素について, 上の関係 古が成立することは自明である。 R. Kurata" は急激ケな転数 空間の起稿なを用いて繰込み理論の正当化を試みた。 しかし なさは Bogoliubov-Parasiukが流の積の一般理論を今まない。

その土除式に関して困難があり、多くの問題点を放している。 Fi. Edwards と R.E. Peierls がは線型化生れた Sdwinger 方程立を、有限次元の Fourier 変換に相当する汎函数 Fourier 変換を形式的に定義して解いたが、彼卑の方法は数学的正当性が生くなく単なる形式的計算であり、その計算すら不明確で曖昧がところが多い。 致えけ起準的に拡張せれた《無限文元空間の一様測度がによる横分を定義し、 F. Edwards 等の結果を正当化する。 我より 起準的が汎函数微積分は Schwinger 方程式以本にも利用できるがここでは触れない。 Diroc 空間、繰込み理論への応用は現在考察中である。

82 超ユークリッド空間 E, Em

Nを自然数の集合(Oを含めて)とし、N上のFiréchedの filterをふくと ultrafitterを固定して芽之二れを以下ろざめ らわす。 finをHermite 函数とする、

$$f_{nn}(x) = \frac{e^{\frac{x^2}{2}}}{\sqrt{2^n \, n! \, \sqrt{\pi}}} H_n(x)$$

$$H_n(x) = (-1)^n \, e^{x^2} \frac{d}{d \, \chi^n} (e^{x^2})$$

 $E = \prod_{n \in \mathbb{N}} \mathbb{C}^{n+1}$ として世を定義する。すなわち $(\mathbb{Q}^{(n)})_{n \in \mathbb{N}} \in \prod_{n \in \mathbb{N}} \mathbb{C}^{n + 1}$ ここに $\mathbb{Q}^{(n)}$ は n+1 次元 ベクトル (a'm) = (a'm) -- a'm) と 芽えてよい) である 。 TCM1 の2元, a=(dm), b= Cbm)に対し,

a~b (n; alm) = blm g < 7.

という同値関係を定義し、それによって TTCMを類別したもの ず 巨さみる。(ぬ)を引くも同値類を[みふさみらわそう。 巨 の元の間には自然に加法が定義され、20上の線型空間となる 。 a,b € E n 内積は当然,

 $(a, b) = [(a^{(n)}, b^{(n)})]_{n} \in {}^{*}C$

によって定表される。ここに (alw, bm) は Chtl上の内積であ 3 .

止の元で、とくにある数列 (d™) € CN があって $[d^w]_n = [(a_0, a_1, -a_n)]_n$

と書けるような元の全体から作られる部分空間を、匠となく これは祝りなと異なり、何らかの集合の超積で書かれるもの ではない。教列 (an), (hn) ∈ CN が E°の元 [CMJn, [bwJn を定 表する時には、「dツ」=「bツ」ならば、実は仕意のれENに対 し an=bnである。いいかえると (an) E CN から臣のの対応

は草斛、したが、て双射となり、心はただの勢引空間である。

Eの元に対し、エルミート函数系 Shafを用いて*Rからないの函数中を対応させ、二の函数の全体を En(*P) とする。
α=[d™]n ∈ 1に対し、

a—→ +=[tn]n=[∑psn qm hp]n あまらかに, a,b ∈ 巨の内積に関して, al→> 4、bl→ 4 と するとき

 $(a,b) = \left[\int \psi_n(x) \overline{\psi_n(x)} dx \right]_n = \left((\Psi, \Psi) \ge \frac{1}{2} \right)$ 中之に上の対応

形古的エルミート科教学間としてのEC において (ap)が急数ケ数列のときには急激少函数 (S) を、複増加数列のときは複増加起函数 (s) を、Cap) が見の場合にはよルベルト学問じを作る。するわち (S) C (E) C (S) C (E)、この関係は任意の目文元で正しい。

§ 3 空間 EC , に上の線型作用表 定義 3-1 中 6 にのとき微分 D中 を定義する。

定義3-2 46 15に対し不定積分 5中はを次立で定義する

$$\int \phi d3 = \left[\sum_{\substack{i \neq i, i \neq i \\ j \neq i \neq i}} I_{gp} a_{p}^{in} h_{g} \right]_{n} \in \mathbb{E}_{n} \quad if \quad \phi \in \mathbb{E}_{n}$$

$$\int \phi d3 = \left[\sum_{\substack{i \neq i \neq i \\ j \neq i \neq i}} \left(\sum_{\substack{j \in N_{d} \\ j \in N_{d}}} I_{gp} a_{p} \right) h_{g} \right]_{n} \in \mathbb{E}_{n}^{\circ} \quad if \quad \phi \in \mathbb{E}_{n}^{\circ}$$

但し II= (Igp)(pulgien it hap= (Dhp, hg)2とするとき、Chap)(pliplen の逆行列でなり、 I=(Igp)q:peNi は Chap)q:peNi の逆行列である。

= (2x) = [\sum_{\text{lplsn}} q_p^{(m)} \text{ipl } \(\text{P}_p^{(\lambda)} \]_n \(\text{E}_n \)

定表3-4 独立変数をかける作用表の定義

$$\hat{\chi} \circ \phi = \left[\sum_{\{p\}, |q| \leq n} 7_{qp} \, q_p^{(n)} \, h_q \, J_n \in \mathbb{E}_n \right], \quad f \in \mathbb{E}_n$$

$$\chi \circ \phi = \left[\sum_{\{p\}, |q| \leq n} \left(\sum_{p \in N_d} 7_{qp} \, q_p \right) h_q \, J_n \in \mathbb{E}_n^{\circ} \right], \quad f \in \mathbb{E}_n^{\circ}$$

$$10 \, L_1, \quad 7_{qp} = (\chi h_p, h_q)_{L^2}$$

<u>注意 3-2</u> 没養 3-4より (4 kp. hg)₁₂ < ∞ (4 p. g ∈ Ma) とかる 整函数 4 をかける 作用表は 自然に定義される。

 $\frac{\text{Lemma } 3-1}{\text{Fig. 1}}$ (1) $7:(s') \longrightarrow E_n^{\circ}$ とすると次の国立は可模である。

$$(s') \xrightarrow{7} E_n^{\circ} \qquad (s') \xrightarrow{7} E_n^{\circ}$$

$$(s') \xrightarrow{7} E_n^{\circ} \qquad (s') \xrightarrow{7} E_n^{\circ}$$

(2)
$$\varphi \in (E_n^{\circ} \circ z + \mathcal{H}(b^{\vee} \varphi) = (\overline{\imath} \circ y) \circ \mathcal{H}$$
 $v \in N$
 $\varphi \in (E_n \circ z + \mathcal{H}(b^{\vee} \varphi) = (\overline{\imath} \circ y) \circ \mathcal{H}$ $v \in N$,

党的第三之前的BAS的。 医自己 2011年 1977

a) d=1のとき証明する。

$$\widehat{\chi}_{0} \varphi = \left[\sum_{0 \leq p \leq n} \int \sqrt{\frac{p+1}{2}} Q_{p+1}^{(n)} + \sqrt{\frac{p}{2}} Q_{p-1}^{(n)} \right] \widehat{h}_{p}$$

でするからみやきずと書くことにすれば、

$$(\widehat{i}_{0})_{0} = \widehat{i} \left[\sum_{0 \le p \le n} \{ \sqrt{\frac{p+1}{2}} \ \widehat{i}^{p+1} a_{p+1}^{(n)} + \sqrt{\frac{p}{2}} \ \widehat{i}^{p-1} a_{p-1}^{(n)} \} h_{p} \right]_{m}$$

$$= \sum_{0 \le p \le n} \widehat{i}^{p} \{ -\sqrt{\frac{p+1}{2}} a_{p+1}^{(n)} + \sqrt{\frac{p}{2}} a_{p-1}^{(n)} \} h_{p} \}_{m}$$

$$= \Im(\widehat{b} \varphi)$$

4.0.4.

example 3-1 d=1次元の場合に述べる

(1)
$$4x^{m} = (2x)^{\frac{1}{2}}(-1)^{m} \xi^{(m)}(\sigma)$$

$$(2) \qquad \delta(x,y) = \sum_{\ell=0}^{\infty} \frac{(-y)^{\ell}}{\ell!} D^{\ell} S(x) , \qquad \forall y \in {}^{\star} | R \in \mathcal{H} \times (\mathbb{R}^{2} + \mathbb{R}^{2})$$

$$(3) \qquad \mathbb{R}^{\frac{1}{2} - \frac{1}{2} + \frac{1}{2}}$$

$$\begin{split} D_{X} \, S(x,y) &= \Big[\sum_{p \leq n} \Big\{ \sqrt{\frac{p+1}{2}} \, f_{p+1}(y) - \sqrt{\frac{p}{2}} \, f_{p-1}(y) \Big\} \, f_{p}(x) \Big]_{n} \\ &= -\Big[\sum_{p \leq n} \, f_{p}(y) \, f_{p}(x) \Big]_{n} \end{split}$$

$$\sum_{\ell=0}^{\infty} \frac{(-y)^{\ell}}{\ell!} p_{\chi}^{(\ell)} S(x) = \left[\sum_{p \le n} \sum_{\ell=0}^{\infty} \frac{(-i)^{2\ell} y^{\ell}}{\ell!} p_{\mu}^{(\ell)} p_{\mu}^{(\ell)} p_{\mu}^{(\chi)} \right]_{n}$$

$$= \left[\sum_{p \le n} h_{p}(y) h_{p}(x) \right]_{n} = S(x, y).$$

(3)
$$\Re(e^{bx}) = (2\pi)^{\frac{1}{2}} \Re(\sigma, ib), b \in {}^{*}\mathbb{R}$$
(3) (1), (2) $\Re(\sigma, ib) = (2\pi)^{\frac{1}{2}} \Re(\sigma, ib), b \in {}^{*}\mathbb{R}$

(4)
$$\beta_1 S = \frac{1}{(2\pi)^{\frac{1}{2}}} S$$

(B) $I = \left(\sum_{j \leq n} \int f_{ij}(x_j) dx_j f_{ij} \right) = \left(\frac{(2\pi)^{\frac{1}{2}}}{\sum_{j \leq n}} \sum_{i} f_{ij}(x_i) f_{ij} \right)_n$

Lemma 3-2 7; (s) —> (s) (injection) とする。次の国立 け下標でする。但し(s) け独立 変数 (s) なの 多項立でする。 (s)

注) Onに高する整函数であればより。

Lemma 3-3 $\lambda \in {}^* | \mathbb{R} \times \mathbb{T}$ 3. $\lambda \in {}^* \otimes \mathbb{R} \times \mathbb{T}$ 3. $\lambda \in {}^* \otimes \mathbb{R} \times \mathbb{T} \times \mathbb{R} \times \mathbb{R}$

立明 な= こるのようれとなく、定義なり、 しかか=にをいかのではのないしては、これの」= かな

<u>注意 3-3</u> り 中が整函数で *p∈Nu について ∫中Rpd3<∞ のとき 中∈ IEn である。

2) $\sum_{m=0}^{\infty} (-1)^{m+1} \frac{C_{m+1}}{M!} s^{(m)} \in \mathbb{F}_{h}^{0}$, 但 $\lim_{m\to\infty} \sqrt{|C_m|} = M > 0$, M=0 の $t \neq hyperfunction <math>t = -$ 視 t = 1.

定義 3-5 $\varphi(x,y) \in E_h(*R^4 \times R^4)$ のとき、 $\varphi(x,y) =$ $\sum_{\|h|,\|k|\in n} A_{pq}^{(m)} R_p(x) R_q(y) T_n と表わされる。行列A = <math>(A_{pq}^{(m)})_{\|p\|,\|q\| \le n}$

が逆行列 B= (B^(m))_{|p|,|g|sn} をもっとき、中(ハ(4)) は可逆であるという。

中(x,4)=[Spin hp(a) hp(4)]n 6 [h(*R**R*))で並元を定義する。

$$\frac{\text{Lemma 3-4}}{\int_{\mathbb{R}^{3}} \varphi(3,3) \varphi(3,n) d3} = \int_{\mathbb{R}^{3}} \varphi(3,3) \varphi(3,n) d3 = S(3,n)$$

84 En, En 上の汎函数微積分, En上の函数 — 一般に 忆値をとる 一は F(4)= [En(4)]n

の形式のものに限定する。 Fm(th) = Fm(Smish qp) は cm)の値のみに依存するから Fmは Cntl 上の 函数と みなされる。

 $\forall_{n \in N}$ にっいて $F_n \in C^1(C^{n+1})$ のとき、 $F \in C^1(E_n)$ 、また \forall_n $\in N$ にっいて $F_n \in (S')(C^{n+1})$ のときに、 $F \in S'(E_n)$ と書く--

$$\int_{\mathbb{E}^n} F(q) \mathcal{L} q = \left[\int_{\mathbb{C}^{n+1}} F_n \left(\mathcal{Q}_o^{(n)}, -- \mathcal{Q}_n^{(n)} \right) \mathcal{L} \mathcal{Q}_o^{(n)} - - \mathcal{L} \mathcal{Q}_n^{(n)} \right]_{\mathfrak{n}} \in \mathcal{K} \mathbb{C}$$

でに、上の汎函数積分を定義する

2) FEC(En) n ≥ \$

$$\frac{\xi F(\phi)}{\xi \phi(3)} = \left[\sum_{\substack{ip|\leq m}} \frac{2F_m}{2a_i^{(n)}} f_p(3) \right]_m \in \left(\left[F_n \right)_{\frac{3}{2}}$$

伯し、4=[冬のから」かで訊函数微分を定奏する。

3) (羽函数 Flourier 変換の定義) FE SCEN)のとき

 $= [(AF_n)(X^n)]_n$

 $z = (z, (\lambda f_n)(\lambda^n)) = \frac{1}{(2\pi)^{\frac{d}{2}}} \int_{\mathbb{R}^n} f_n(x) e^{\lambda x} dx \in S(\mathbb{C}^{nH}) \ z^n \partial_{x} \partial_{x}.$

Theorem 4-1

- 1) F, G E L1 (1En) => (F+G)84 = (F+84+) G84,
- 2) 中。 En を1、固定すると、FEL'(En)のとき 「F(中中。) 6中 = 「F(中) 8中 、 101 中 = 中。十中 、
- 3) Haurier章 ま チャラ きゅく とき、 中子(ず) チャー (ず) チャー

4)
$$G \in C'(E_n) \cap B(E_n)$$
, $F \in C'(E_n) \Rightarrow$

$$\int G(\phi) \frac{FF(\phi)}{F\phi(3)} \delta \phi = -\int F(\phi) \frac{G(\phi)}{F\phi(3)} \delta \phi$$

$$\begin{array}{ll}
\text{If } \xi \leq S(\text{IE}_{N}) \Rightarrow \\
\frac{SF_{N}(\phi)}{\delta \phi(3)}(\lambda) = \int \frac{\delta F_{N}(\phi)}{\delta \phi(3)} e^{\frac{1}{2} \int \phi(3) \lambda(3)} \delta(\frac{\phi}{\sqrt{2\pi}}) \\
= -\frac{1}{2} \lambda(3) \left(\frac{1}{2} + \frac{1}{2}\right)(\lambda),
\end{array}$$

せらに羽函数 Frourier孝操と、その共役李操は S(FL)。とS(FL)。の間に互いに连は同型対応を定める。

Theorem 4-2

1)
$$G_1 F_1 \in C'(F_1) \Rightarrow \frac{5}{5+(3)} \left\{ G(\phi)F_1(\phi) \right\} = \frac{5G(\phi)}{5+(3)} F_1(\phi) + G(\phi) \frac{5F(\phi)}{5+(3)}$$

- 2) $F(G(P)) = G(G(P)) \Rightarrow \frac{g(P)}{g(P)} = \frac{g(P$
- 3) $f \in C(R)$ or $z \neq 1$, $\frac{S}{S + (S)} \frac{2}{S + (S)} f(A(N)) = \frac{2}{S + (S)} \frac{S}{S + (S)} f(A(N))$
- 4) (hain rule), $F_1(4,3) \in C'(F_n) \times F_n \Rightarrow$ $\int \frac{SF_1(4,3)}{S\phi(n)} \frac{8}{SF_1(4,3)} d3 = \frac{8}{S\phi(n)}$
- 5) $F_{\epsilon} \in C^{2}(|E_{n}|)$ $n \geq \pm \frac{s^{2} F_{\epsilon}(\phi)}{s \phi(3) s \phi(n)} = \frac{s^{2} F_{\epsilon}(\phi)}{s \phi(n) s \phi(3)}$

$$\frac{\text{example 4-1}}{\text{5}\phi(n)} = S(3,n)$$
2) $f \in C'(R)$ or $z \neq \frac{S}{\text{5}\phi(3)} \int f(\phi(n))d\eta = \int \frac{\delta f(\phi(n))}{S\phi(3)}d\eta$

$$= \int \frac{3f(\phi(n))}{S\phi(n)} S(3,n)d\eta = \frac{3f(\phi(3))}{3\phi(3)}$$

Theorem 4-1, 4-2 の証明は、すべて耳限次元空間の微積分

の定理に還元できる。

§ 5 Schwinger 方程式.

量子化された場の理論にないては Green 函数 G(a,x), x,xée Rt はその系の 林能を特徴がける。 Green 函数のみたす方程 対は、てのままの形ではなめることはできない。しかし仮想 的が本部場を導入したときの Green 函数 G(a,x;中) については中に関する functional differential equation (= れが Shwinger equation と呼ばれる)を導くことができる。もし G(a,x;中)が本まれば マ(a,x)=G(x,x;0) とすればない。 Schwinger equation の解を閲数空間上の積分型 (continual integral)で表現することが望ましい。数では Shwinger 方程式の解を促上の"continual integral"で表現して取扱う。

nucleon と meson の相当作用についての Schwinger 方程 立は、

$$[-i\gamma_{n}\frac{2}{3\eta_{n}}+m-\beta\gamma_{5}\phi_{(n)}+i\beta\gamma_{5}]L_{3}\Delta(x,3;\phi)\frac{5}{3\phi_{(3)}}]\phi_{(x,x';\phi)}=\delta(x-x')$$

$$[-\Box_{3}+\beta^{2}]\Delta(3,3;\phi)=\delta(3-3)+i\beta\Gamma_{5}\gamma_{5}\left(43\Delta(3,n)\frac{5\alpha_{5}(3,3';\phi)}{5\phi_{(n)}}\right)$$

$$-9\Gamma_{5}\gamma_{5}\phi_{(3)}G_{(3,3';\phi)}-...(5.2)$$
Yi it Dirac matrix, $\Box_{3}=\frac{2^{2}}{33^{2}}+\frac{3^{2}}{33^{2}}+\frac{3^{2}}{33^{2}}+\frac{3^{2}}{33^{2}}-\frac{3^{2}}{33^{2}}$

簡单のため問題を linear にして (52)を (-13+1を) (33)= 8はつる)

でなせかえる。

とおくと

え: En×En×S(En) --> En×En×S(En)

is operatorを対えられる。ここにGは、がわりは記準的に一般化された函数すかわち En×En×S(En)の元と考える。

-9万中(n) の頂を消去するために、

 $\varphi(x,x;\phi) = \varphi(x,x;\phi) R_1^{-1}(\phi)$ $R_1^{-1}(\phi) = \exp\left(-\frac{i}{2} \int_{R_1^{+}}^{1} \phi(x) \Delta(x,x') \phi(x') dx' dx'\right)$

Etik E, Lemma 3-4, Theorem 4-2-1 & 1)

ここで汎動 Fourier 李韓の公立 (Theorem 4-1-6) を用いると、

Rを評価するために,

& Fi L & , Lemma 3-4 & 1)

$$P_{2}(\lambda) = \exp \left\{ -\frac{i}{2} \int_{|x|p^{4}} \lambda(3) \Delta(3, \frac{1}{3}) \lambda(3) d3 d3 \right\}$$

$$\times \int \exp \left\{ \frac{i}{2} \int_{|x|p^{4}} d(3) \Delta(3, \frac{1}{3}) d(3) d3 d3 \right\} \delta\left(\frac{d}{\sqrt{2\pi}}\right)$$

$$= C \exp \left\{ -\frac{i}{2} \int_{|x|p^{4}} \lambda(3) \Delta(3, \frac{1}{3}) \lambda(3) d3 d3 \right\}$$

(53) 対に下いて、 又(3)= (Δ(3.4))(3)(3) という変数変換をすると、

$$[-i/\sqrt{3}/M + m - g/\sqrt{2}]G_{2}(x, x'; \Sigma) = (\delta(x, x'))$$

$$\times \exp \left(-\frac{i}{2}\int_{x|p|} \Re(x) \Delta'(x, x'; \Sigma) + (\delta(x, x')) \right)$$

 $z = z^{\alpha} - G_{2}(x, x'; \Delta) \equiv (\mathcal{H}G_{1})(x, x'; \lambda)$

G, (x, x; 2) E

[-i/wfm+m-g/spm] G, はからか)= 8はか)--(55)
すかわち未部場ののの下での相互作用を考えかいときのGreen
函数とする。一方

$$= P_{1}^{-1}(4) \int_{G_{2}(x,x';\Omega)} 2xp \left\{ -i \int_{\Omega(3)} \vec{\Delta}_{(3,3)} d_{(3)} d_$$

$$\begin{array}{lll}
c & (x,x') = c & (x,x';0) & & & \\
c & (x,x') = c & (det \bar{\Delta}') & (G_3(x,x';\Omega)) & & (G_3(x,x';\Omega)) & (G_3(x,x';\Omega)) & & (G_3(x,x';\Omega)) &$$

し代引立を一般の場合に解くには、旧ル上のスペクトル分解の 定理を使うのが便利である。しかし釉面の都合上述べられないので簡単にとける場合のみを取扱う。

meson recoil が無視できる場合、ス= (ス,ス,ス,ス,ス) の弘 数はすべて え。こもの 函数となり、(45)立け簡単にとけて

伯(
$$(i\frac{\lambda}{\lambda t} + m)$$
 $(t,t') = \delta(t,t')$

(it, 7) =
$$C \left| \det \overline{\Delta}' \right| S(t, t') = \exp \left\{ \frac{\hat{c}}{2} g^2 \right\}_{t'}^{t+3} \int_{t'}^{t} d\vec{s}' \Delta(\vec{s}, \vec{s}) \right\}$$

$$= C c' | dat a' | axp { \frac{1}{2} \g^2 \bigg(\frac{1}{43} \display \lambda (3.3) \right) \frac{1}{43} \display \display \frac{1}{23} \right) \}$$

 $= 1 = \frac{\left(\frac{1}{2K}\right)^{\frac{1}{2}} \left(\frac{1}{2K}\right)^{\frac{1}{2}} \left(\frac{1}{2K}\right)$

pil=

$$G(t,t') = S(t,t') \exp \left\{ \frac{1}{2} g^2 \int_{t'}^{t} d3 \int_{t'}^{t'} d3 \int_{t'}^{t} d3 \int_{t'}$$

△(3.5) Y L T

$$\left(\frac{3^2}{3t^2} - \sqrt{1+\beta^2}\right) \Delta(t,t',\vec{\chi},\vec{\chi}') = \delta(t,t') \delta(\vec{\chi},\vec{\chi}')$$

の解をとれば以前 Tomonagab によって得られた厳密解と一致する解を得ることができる。

注意5-1 1) Schwinger う程立を耐く際にあられれた積 中の4の4の9 年は ultroprodutの意味での積 [中代]、である。

2) Shvinger 方程立を超準解析で取扱うのは自然である。 でせかというと、 fermion の Green 転数の場合 注1) 2(3)= 2(3)- 9 (△(3, n) d) という平行移動を行った。

とりう量で汎函数微分量Up(n) を行う。ところがSc, Dnd は 因果的Green 函数,Aut (n) は超函数であるから Ub(n)には,超函数の横、合成積が現めれてくる。このようか量を超函数の範囲内で芽えることは不可能であるから,超函数を一般化した函数の理論が必要である。

文献

- 1) G. Takeuti ; Proc. Top. Academy 38, 414-418 (1961)
- 2) M.O. Farrukh; Journal of Mochematical Physics vol. 16. NO.2 February 1975.
- 3) R. Kuratu; Mem. Flac. Engi. Kyushu. Univ. val 25 (1965-1966)
- 4) Bogoliubov, N.N. and O.A. Parasiuk; Acta Machematica. 97. 227 (1957)
- 5) S.F. Edwards and R.E. Peierls; Proc. Roy. Soc. (London) A 224, 24. (1954)
- 6) S.I. Tomonaga, Progr. Theor. Phys. Osaka 1. (1946).